

前号で書いたように、青島市の歴史を見ると、その昔は青島という地名は表われず例えば秦のころの歴史地図を見ると「瑯琊^{ろうや}」や「即墨^{そくぼく}」の名が出ている。どちらも昨年の旅で足を延ばしたかったところだが、市の中心から遠く日程上行けなかった。この二つの街は、歴史上の有名な人物や故事と深い関わりがあるのである。それぞれ簡単に触れてみたい。

まず「瑯琊」は、秦の始皇帝の行幸したところである。地図で見れば膠州湾^{こうしゅう}の南西の方角に当たり、青島市全体からは南端に位置し黄海に臨んでいる。始皇帝は各地を巡幸し、行く先々で石碑を建て、天下を統一した自分の功績を彫りこませるのが常であった。ここ瑯琊にも石碑を建てている。

彼は海のない街で育ったためこの地が気に入ったからか、あるいはこれから述べる健康上の理由からか3度も訪れている。おそらく後者の理由と思われるが、自身の健康に自信がなかったのか不老長寿の薬を強く求めた。そして日本でも有名で伝説の人物でもある徐福に東方の蓬莱という島を目指させ、薬を探そう命じている。そしてBC219年には徐福を見送るためこの地に「瑯琊台」を造らせた。ガイドブックなどの写真を見ると、彼が東方を指さしているように見える像が置かれている。

次に「即墨」であるが、この街は始皇帝が国家統一する前の戦国時代、齊の武将・田単の「火牛の計」で有名である。ご存知の方が多かろうが、以下のような故事である。〈BC284年、燕という国が齊の首都・臨淄^{りんし}を攻め占領した。田単はかろうじて即墨に逃れた。この城の城主は燕を迎撃したがあえなく討ち死にした。そして城中で善後策を協議した結果、田単を将軍として城を守ることになったのである。彼は千頭の牛を用意させ、角には刀剣、尻尾には松明を括り付け、夜中に城壁の開けておいた穴から牛を引出し、松明に火をつけるという乾坤一擲の策を用いたのである。荒れ狂う牛の突進に燕軍は、角で刺殺されたりして壊乱した。田単は奪われた城をこ

とごとく奪回し、これにより時の齊の襄王から功績を称えられ、安平君に封じられた。〉

ところで日本でも源平の合戦でこの策を木曾義仲が実行したとされる。1183年の倶利伽羅峠^{くりにがら}(石川県と富山県の境にある峠)の合戦で、火牛の計を用い夜襲をかけて平維盛軍を打ち破ったと言われている。以上二つの街の故事について述べたが、では青島という地名の由来は何かと調べていると、友人のMさんが制作されたお手製の本である「青島短期留学記」に次のように書かれてあった。

〈パンフレットによると、1898年(明治31年)にドイツが膠州湾租借条約を結んだ時、沖合の島(小青島)の名から青島となったとある〉

この小青島は青島湾に浮かぶその名の通り小さな島であるが、今は陸続きになっている。私は行ったことがないが、あの青島市のシンボルである栈橋からすぐ近くに見える。

さて青島市での2日目は、道教の聖地である「嶗山」に行った。嶗山は市の中心部から東に約40km行ったところにある。前回紹介した成都市の「青城山」も道教の聖地であるが、さすがに道教発祥の地の中国では各地に道教の聖地がある。日本では道教の聖地は聞いたことがないが・・・。

今、この原稿をお正月に書き始めている。歳を取ってきたせいかもしれないが、近年七福神めぐりに興味を持っている。七福神はいずれも身近な神様ばかりで、若いころはその殆どが日本古来の神様とと思っていたが、実は日本古来の神様は恵比寿様だけである。残りの六神のうち、三神はインドの神様、三神は中国の神様でその中の「寿老神」と「福祿寿」は道教が起源の神様である。道教がどのようなルートで日本に入ってきたのかは知らないが、意外なところに影響を与えているのに驚かされる。昔から日本人は外来の文化、宗教、習慣などを素直に受け入れてきた(一部は軋轢もあったが)心の優しい国民である。現在世界の各地で宗教が原因の紛争が多発してい

るが、日本を見習えば平和がもたらされるのではと
思ったりしている。七福神めぐりも、どの神様に対
しても平等に敬意を払い手を合わせるのである。あ
の国はいやだからあの神様にはお参りしないなどと
心の狭い考えは誰も持たない。昨年私は、「日本橋
七福神めぐり」で心を清め、今年の正月は「浅草七福
神めぐり」で世の中の安寧を祈った。

さて前段が長くなったが、朝8時半にホテルを
出て近くのバス停からフロントで教えてもらった
304番のバスに乗った。運賃はたったの1元である。
40kmを1元では申し訳
ない気持ちとなる。バスは
海沿いに約1時間余り走っ
た。途中嶗山の風景区の一
つである「石老人」という
名勝地を過ぎる。バスから
は見えないが、海中から老
人が立っているような岩
が出ているとのこと。いわ
れがあるようだが後でガ
イドに聞いても適切な答
えが返ってこなかった。

ようやくターミナルに
到着してバスから降りる。
すると現地ガイドが大勢
いて、皆客の取り込みに
忙しい。私のところにもガ
イドが来たのでガイド料
を聞くと、意外にも安くて
50元だというのでお願いした。いろいろ話をするう
ちに嶗山の風景区はかなりの広域でいくつものルー
トに分かれているらしいことが分かった。その中で
太清宮のある太清景区をすすめるのでそこに行く
ことにした。このルートは切符売り場に案内されて
買ったが130元と結構高い。ここまでのバス代はタ
ダみたいであったが、これからなんだかだととられ
る予感がする。

ガイドは太清景区行きのバスに案内し、乗るとす

ぐバスは発車した。バスの進行方向右は青い海が見
え、反対側は岩山が続きどちらも美しい。10分くら
い乗って着いたところから海沿いの散歩道を行く
と、前方にこんもりした森が見えてきた。観光客は
みなぞろぞろそちらに向かっている。そのうち石畳
の広場に出た。正面に中国独特の石造りの門があり、
上の方には「嶗山太清宮」と彫ってある。この太清宮
は嶗山にあまたある道観の中で一番規模が大きく、
もっとも古い歴史を誇っている。前漢の武帝の時代
にはすでにこの場所に神を祀る廟があったというか

ら2千年以上の歴史を持
つことになる。

石の門をくぐり入場口
で20元支払い、左右の建
物を見ながら奥に進む。す
ると大きな建物の前に出
た。みな跪いて熱心に拝ん
でいる。そばに線香売り場
があるので見てみると、例
の大きな線香が最低でも
100元なので買うのはや
めて手を合わせるだけに
した。ガイドが次は「明霞
洞」に行きます、と言って
また別のマイクロバスに
乗り込んだ。しばらく走っ
て「嶗山太清索道」と看板
があるロープウエー乗り
場に着いた。索道とはロー

プウエーのことだ。ここでまた80元の切符を買わ
される。80元は当時のレートでは約千円である。少
し並んで乗り込むとロープウエーは一気に上昇して
いく。少し霏がかかっているが視界は比較的良い。
岩山と緑のコントラストが本当に綺麗だ。いろいろ
な岩が迫ってくる。日本の緑に覆われた山も綺麗だ
が、中国に多い岩山はどこも絵になるくらい美しい。
嶗山は、「国家5A級旅游景区」と最高レベルの観光
地と書いてあったが、その名に恥じない景観である。



嶗山太清宮・石門の前で(筆者)

ところでロープウエーのチケットの裏側を見ると、いくつかの注意事項が書いてある。そこには、心臓病、高血圧、高所恐怖症のひとは乗車禁止とある。私は、高所恐怖症だから本来乗れなかったのだ、などと思っているうちに終点に着いた。そこから石段を20分ほどさらに登ると「明霞洞」に着いた。ここまで来ると真夏であったが少し涼しい風が頬を撫でる。この洞は覆いかぶさってくるような大きな洞窟で昔の道士の修行の跡地だそうだ。夾竹桃に似た花が咲き乱れていた。ここでも5元とられた。最初に



龍潭瀑

130元払ったのに行く先々でお金をとられる。それなら最初に300元とか400元にしていちいち追加料金を払うのはやめてほしいと言いたいが、言っても仕方がない。

またロープウエーで下に降りると、「昼食にしますか」というので大分歩き疲れたことだしお昼にすることにした。するとどこからかマイクロバスが来て、これに乗れと言う。どこに行くのか分からないまま、海沿いの坂道を何度か上り下りするうちに、あるレストランに着いた。あまり綺麗な感じではない。二階に上がってテーブルのメニューを見るとどれも高そうだ。今更違うお店という訳にもいかないので、ある魚を指さすと女店員はすぐメニューを下げ奥の方に行った。

15分くらい経っただろうか、大きな皿に大きな煮魚が一匹のったものが運ばれてきた。別に野菜の料理やスープやごはんが運ばれてきた。私が野菜の料理は頼んでないという、女店員はこの魚料理についているのだという。ご飯は例のアルミ製の丸い器にぎゅっと詰まっている。ご飯とご飯がくっついて持ち上げると塊のようになってくる。量がたくさんあればいいというものではないと言いたいが、中国各地を旅行するとこんなご飯をよく出される。食べ始めたが如何せん量が多すぎて大分残してしまった。

「買単(マイタン)」という店員はすぐ伝票を持ってきた。見ると300元近い数字が書いてある。何か

の間違いかと思い、確かめるとこの通りという。日本風に言えば煮魚定食が、当時のレートで換算すると4000円近いということである。後でガイドに「この店は高すぎるではないか」と文句を言ったが、どこ吹く風の様子であやまる気配もない。おそらくこの店からバックマージンをもらうのかもしれない。うかつにガイドに任せた私が悪いということであろう。折角の楽しい旅に少し水を差された気分になった。食後、「龍潭瀑」の入り口のところでガイドに50元を渡し、別れを告げた。

入り口からまた石段を20分くらい登ると大きな滝が見えてきた。幅の広いネクタイに似た滝で、落差は20～30メートルくらいありそうだ。水量も多くなりの迫力であった。石段の左右には土産物店が立ち並び、観光客をしきりに呼び込んでいた。

この滝を最後にホテルに向かうことにした。ここからホテルまでは2時間程度かかるからだ。行く先々でいつも思うがやはり中国は途方もなく広い。嶗山全体では景区が10か所あまりあるようだ。すべて見るには1週間程度かかるのではないか。ホテルに戻って改めて地図を見て確かめると、本日の行程は嶗山全体のほんの一部であった。昼食ですこしいやな思いもしたが、これも思い出のひとつである。夕食は簡単に済ませ、明朝早いので荷物を整理して早めに休んだ。次回青島にいつ来られるかわからないが、次回はまず「嶗琊」と「即墨」に行こうと決めた。

(青島の項終り)